

「田村俊子」を読んで

那賀川 眞理

「寂聴自伝」を読んでいて、寂聴さんの経歴で気になったことがある。「田村俊子賞」だ。数々の文学賞を受賞された寂聴さんだが、作家として認められる大きな一歩になった作品が「田村俊子」で、第一回田村俊子賞を受賞したとある。田村俊子賞とはどのようなものか、そもそも田村俊子とはいったいどんな人物なのか。

田村俊子は大正時代に活躍した作家だ。一八八四年に東京の下町で生まれ、日本女子大を中退し、幸田露伴に師事した。露伴の兄弟弟子だった田村松魚と結婚した後なかなか作品を書けなかったが、生活苦により応募した懸賞小説で当選したことから文壇デビューをする。また演劇にも興味を持ち、舞台にも立つ。その後松魚と別れ、ジャーナ

リストの鈴木悦を追いかけてカナダに渡る。十八年後帰国すると今度は日本国大使館嘱託として上海に行き、終戦間近の中国で客死している。

自分に真っ直ぐな生き方には驚かされるが、

樋口一葉がとげられなかった職業作家として、女で最初に成功した人であった。つまり小説を書いて食べられた女流作家第一号であったのだ。（「寂聴自伝」）

大正時代、男性社会の中で女性が筆一本で生計をたてるといえるのは大変なことだったのだろう。

寂聴さんが田村俊子の名を初めて聞いたのは、新婚時代の北京だった。寂聴さんの夫になった人は社交的な人で新居は北京在住の日本人の文化サロンのような場所になって

いた。私は勝手に寡黙な学者だと思っていたので少し驚いた。その部屋には、なんと李香蘭も訪れたという噂もあったそうだ。常連の一人だった大学教授の田村ふさから「田村俊子は読んだ。」と聞かれたのだ。

田村俊子賞は「田村俊子補遺」によると、

俊子賞は、俊子会において設定され、過去一年間の女流の文学作品の中で、受賞にふさわしいと認めたものに、俊子の印税をつみたてた金の中から賞金を出すという決りになった。選者は阿部知二、草野心平、立野信之、武田泰淳、湯浅芳子、佐多稲子、山原鶴、小林可津子の諸氏が当たった。賞金は五万円と定められ、俊子の印税がつきるまでつづけられるという計画であった。

第一回一九六一年の瀬戸内晴美の受賞から十七年続いた。主な受賞者に、森茉莉、倉橋由美子、竹西寛子、萩原葉子、石垣りん、高橋たか子、富岡多恵子、武田百合子等々の名前が並んでいる。私好みの人選で嬉しくなってくる。その後も続いていたらどのような作家が選ばれていただろう。そして、気になるのが選者の一人にロシア文学者の湯浅芳子の名前があることだ。

伝記小説「田村俊子」は鎌倉の東慶寺での没後第十四回の法要の場面から始まる。寂聴さんは北京で名前を聞いたことがあるだけで、生前の俊子とは一面識もなかったが、「田村俊子」を書くためにゆかりのある山原鶴と湯浅芳子、法要へ参加する機会を得る。施主は山原鶴と湯浅芳子だった。湯浅芳子は寂聴さんの伝記小説「孤高の人」の主人公で、自由奔放な性格で、寂聴さんは金銭的な面でも人付き合いの面でもかなりふり回され、「おめでたい嬢ちゃん婆ちゃん」と書いていた。しかし、ここでは田村俊子には本当によく尽くしている。生前はもちろん、亡くなっても法要をし、お墓もたて、更に「田村俊子賞」も設立している。文筆で生計を立てた俊子には一目も二目もおいていたのだろう。金沢出身の山原鶴は女学校の学生の頃から田村俊子の熱烈なファンだった。東京に行けば会えるかもしれないと、東京の女子大に進学した。同級生の間でも田村俊子の人気は絶大だったようだ。しかし、大学側からは「不道徳」とされていた。俊子の作品は私小説が殆どで、その自由な生活を赤裸々に描いていたからと思われる。「私小説を書く」と言うことは裸で街を歩くようなもの」だとある日の寂聴塾で寂聴さんがおっしゃったのを思い出す。田

村俊子はそのような覚悟のできる書き手だったのだ。

寂聴さんは「花芯」で酷評を受けた後、「田村俊子」を書き始めるのだが、「人から受ける誤解の正体を、私は田村俊子の上に自分を重ね、さぐりつづけた。」（「寂聴自伝」）とあるように、作品を正しく評価してもらえなかった悔しさをモチベーションに代えて書き始めたのだ。

ところで田村俊子はどんな作品を書いたのだろう。現在田村俊子の全集は、ゆまに書房から「田村俊子全集」全九巻＋別巻が出版されている。作品は大正二年から大正五年に集中していて、俊子の作品の大部分は三十歳前後に書かれている。

そこで代表作と言われる「木乃伊の口紅」が掲載されている第三巻を図書館で借りてきた。ページを開いて驚いた。大正時代に出版された形そのままを復刻しているのだ。雑誌や新聞ごと活字もページの形態も全く違う。原版によつては活字がつぶれかけていて読みにくい。幸い「木乃伊の口紅」は比較的読みやすく安心した。

この三巻には大正二年一年間に発表された五十二作品が掲載されている。毎月雑誌や新聞に小説はもちろん随筆、書評、劇評と様々な分野の文章を書いている。「木乃伊の

口紅」は大正二年四月一日発行の「中央公論」掲載で、田村松魚との生活を忠実に書いた私小説だ。この作品をもとに、寂聴さんは二人が住んでいた谷中の家に足を運び、小説の中のエピソードも検証している。

全集の「刊行にあたって」を読むと、

田村俊子は文壇という男性中心の市場に、本格的な職業作家として参入した初めての女性作家でもある。

ただし、大正七（一九一八）年にその経歴を中断、恋人の鈴木悦を追ってカナダに渡った後、一時帰国をはさんで中国で客死したこともあって、文学史的には長い間忘れられた存在だった。戦後、瀬戸内晴美（寂聴）の伝記小説『田村俊子』文藝春秋新社（一九六一年四月）によって改めてその人生に光が当てられたが、肝心の作品を読むことが難しい状態が続いた。

その後一九八七年にオリジン出版センターから作品集が刊行されてから、その評価が高まり、二〇一二年になり、ゆまに書房から「田村俊子全集」が発刊されたということだ。

ここにも書かれているように、世間から忘れられていた「田村俊子」の資料を集め、その足跡を辿った寂聴さんの

苦勞は計り知れないものがある。

俊子のみならず、鈴木悦の故郷へも向かう。愛知県豊橋へ向かい悦の妹まつに会うことができた。俊子は悦が亡くなったことを知って鈴木家を訪れ、悦の老父に「おとうさん」と実の娘のように振る舞い、母うめともすっかり仲良くなり沢山の着物などを「これちょうだいね」ともらっていったそうだ。そんな俊子をまつはこう語る。

「本当に不思議な魅力のある人でした。物をねだれても、ちっともいやしい感じがしないで、あげてあとの良い気持ちののこるのは、あの人の人徳でしょうね。」
まつは俊子を悦と同じ墓に入れても良いと思っていたそう。なんと優しい人達なのだろう。

俊子の父方の系譜は「田村俊子」を出版してからわかる。経営の下手な事業好きな男で、母は子供のような若い役者と暮らすが身を退きそのままになったという。そんな家庭環境から大正時代に大学まで進学したのだから、俊子とは本当に芯の強い女性だったのに違いない。

資料を集めるのに苦勞していた寂聴さんに、最初に田村俊子の存在を教えてくれた田村ふさの近況を友人が連絡してきた時、寂聴さんはあまりの嬉しさに、「雀踊りしそう

になった」とある。よほど嬉しかったのか、しかし、雀踊りとは仙台などで有名なあの踊りだろうか。山原鶴の時も偶然新聞記事で田村俊子の関連の名前を見つけ「雀踊りしなくなった」とある。そのような言い方もあるのかと、日本国語大辞典を調べてみたがない。どうせなら阿波踊りにして頂きたいものだ。と思つて元国語の教師の友人に話したところ、広辞苑に「こおどり」の項に「雀踊り」とも書くところがあると教えられた。「こおどり」から調べたらよかつたことに改めて気づかされ。笑うしかなかった。

結局私は田村俊子の全集の中の一冊しか読んではいないが、バラエティ豊かな内容の作品は大正時代という古くささを感じさせず、風景描写などはととするような美しさがあり新鮮だった。確かに今改めて注目されるべき作家だと思つた。